

中国的思考と行動様式

——日中の比較を中心として——

清水徳蔵

まえおき

一、風土と民族的性格

二、家族・社会構造と民族的思考

三、文学にあらわれた思惟

四、外来文化の受容の構造

五、歴史にあらわれた民族的思惟

まえおき

自然環境というものは、そこに生活する民族の生活感覚、社会のつくり方、自然観、美意観、文化、民族的性格及び行動様式の形成にいたるまで微妙な影響を与えるものである。同じくアジア人種と呼ばれる日本・中国・

朝鮮の人々では、物の見方、物の考え方、行動様式に大きな違いがあらわれている。それも、風土の相違、国際環境の相違によって影響されているようである。本論では、風土・環境の相違が日中の思考と行動にどう影響しているかを比較考察しながら、中国的思考と行動様式の特徴を研究しようと試みたものである。

一、風土と民族的性格

(一) 自然環境と自然観・美意識

1 日本 その美しい風土と豊かで規則正しい季節の変化とによって、日本人は豊かにして繊細、かつ鋭敏な感受性と美意識とを形成してきた。山本健吉氏はその著、「ことばの歳事記」の中で次のように述べている。「日本ほど季節の変化の豊かな国土はないと言われている。それは、国土がほぼ規則正しく寒暑が交代していく温帯に位置を占めているとともに、四方海にかこまれ、夏と冬とに季節風が吹き、春雨や梅雨や台風などといったいちぢるしい季節現象に見舞われるモンスーン地帯にあることからきている。このことは日本人の季節の移りかわりに対する感受性を非常に鋭く、かつ繊細なものにした。おそらく風の名や雨の名を日本人はどたくさん持っている国民はほかにないであろう。……これらの季節現象はその生活と生活感情の深部までしみ透って、影響を与えている。それはあらゆる日本人の共通の経験であり、共通の知識である。ある場合には、共通の美意識、共通の思想を形成する種ともなる」と。たしかに、日本は風や雨の名が美しくも豊かである。「春風、春一番、東風、夏風、涼風、台風、秋風、西風、北風、木枯し、突風、そよかぜ、旋風」などと、季節感豊かな風の名があるし、その風の吹くさまにも、「そよ／＼、さつ、／＼」などと豊かである。雨ともなると、「春雨、五月雨、菜種

づゆ、梅雨、霖雨、夕立、卯の花くたし、秋雨、時雨、俄雨、驟雨、雷雨、霧雨、氷雨」などと、これも季節感があふれている。雨の降り方でも、「しとく、ざあく、ざあつ、ぼつりく」などと微妙かつ多彩な表現がなされる。

また、美しい豊かな自然と規則正しい季節の移りかわりによって美しい花が一年を彩っている。「梅花」で春の到来の近きを知り、「じんちようげ」「れんぎよう」で春の訪れを喜び、「桜花」「チューリップ」で春の爛漫に酔う。「さつき」「つつじ」「菖蒲」「あやめ」「ふじ」が五月。「あじさい」が六月。「朝顔」が七月。「吾亦紅」「向日葵」が八月。初秋には「コスモス」が紺碧の空に映え、中秋には「ススキ」「萩」が山野を色どり、晩秋には「菊」が咲き誇って、香る。また、色づいた果物の実が日本列島をおおう。年末から年初にかけては、「冬至梅」「紅梅」「こでまり」「山茶花」「椿」がひっそりと咲く。このように、一年中花暦が繰り展べられる。

このような美しい自然環境の中に生活する日本人は、草木を愛し、自然を友とし、自然と調和して生きる「自然観」と、自然をそのままとりいれ、自然を生かしたものが美しいと感ずる「美意識」を育ててきた。

中国の場合。「黄河文明」（漢文明）の世界では、中華の人々が接した自然というものは、黄砂と石塊のドライなもので、美しいと言える自然環境ではなかった。中華の人々が美しいと感じたものは、地上ではなくて、星が煌く上天であった。地上に自然の美を求めることができなかった中華の民はエジプトの民と同じように、美を天に求めたのであろう。中国の最も古い書籍である「詩経」には、天に関する形容詞が豊富である。日本が自然の美を愛し、花や雨風に豊かな名称を与えたとは対象的に、中華の人々は天上に美を発見し、「上天」「蒼天」「旻天」「昊天」「皇天」などという天に関する名称をつくりだしている。中華の人々が地上の美を発見するのは揚子江流

域に南下してからである。しかし、地上の美よりも、地上の黄河・揚子江の洪水、早ばつの方がより恐いものであった。自然の恵みよりも自然への畏れの方がより強かった。しかも、中華の人々にとって、自然を畏れていては生命・財産を守ることが出来なかった。自然へ挑戦し、自然を克服することによってのみ生命も財産も獲得できたし、守ることもできた。したがって、中華の人々の「自然観」は、自然への畏れ、自然への挑戦、自然の克服であつた。

(二) 自然の変化と民族的思惟

日本 季節の規則正しい変化を特徴とするが、その天候はきわめて不規則かつ急変がある。また台風・洪水・地震・火山噴火などのような自然の突然の変化がある。しかし、それは日本人の生活や環境を全面的かつ徹底的に破壊してしまうようなものではなく、局地的であり、局部的である。したがって、日本人の自然に対する畏れは限定的であつて、むしろ忍従し、耐えるものであつた。そこから、日本人の性格には激情性とともに、強い忍従性、忍耐心とを形成し、環境追隨・環境順応性と淡泊・卒直・単純・清潔・明快さが育成されてきたように思われる。

中国 その自然環境は二元的もしくは二面的ともいえるものである。平常はズームな広いスペースの上を、東流する黄河も揚子江ともに悠々然として中華の人々の平和な生活にマッチしている。その姿はあたたかも、五千年の悠久の歴史を映して流れているようである。それを反映した中国の人々の性格は「悠久的・楽天的・巨視的・遠視的・長期性」の特徴を示している。しかし、一度、黄河・揚子江が怒ると、大洪水となって、広い範囲

の流域の人々の生活を破壊しつくしてしまふ。逆に、少雨年の際は、しばしば大旱ばつがもたらされて、人々に飢餓を強制する。古来「三年小災」「五年大災」と言い伝えられる程に、早ばつと大洪水と虫害とがこもごもおとずれる。その破壊と被害は苛酷である。その苛酷さと悲惨さは、すでにパールバック女史が「大地」の中で克明に画きだしている。この自然の怒りのすぎまじさは、中国の人々の性格の中に、「苛酷さ、残忍、残虐、戦闘性、熱狂性、激情性とともに、忍従性、強靱性、個人主義、利己主義、生命・財産への執着性、天命観、没法子の性格を育成してきたようである。すなわち、中国の二元的、二面的自然環境は、中国の人々の性格の中に、上記のような矛盾する、二面的・二元的性格を形成させたようである。

(三) 絶対者(神)と人の関係

人類はその昔から、その居住する地域・社会における絶対者や超越者を神としてあがめてきた。そこで、日本と中国とが絶対者(神)と人との関係について、どのような相違があるか、それによって、民族的性格、思维がどのように相違しているかを比較してみよう。

日本 恵まれた自然環境、美しい風土に生活した日本人は、見るもの聞くもの触れるものの中に、神を発見し、「八百万神」をつくりだしてきた。また、自然の暴力、例えば台風・地震・火山噴火がしばしばあったが、それは局地的であり、人々とその生活のすべてを破壊しつくしてしまうようなものではなかった。むしろ、自然の恵みや美しさや畏敬の方が強く感受された。したがって、自然や神に対する畏れなどは弱く、神を祭り、祈ることによって、神に近づき、神に甘へ、神の怒りを鎮めることができると考えてきた。また、神に折り、「合掌」することによ

て、神と人とは一体化し、神に救われた。したがって、日本人は事あるごとに、どこでも、よく神に祈り、神に願ひ、神に頼つてきた。道端の道祖神・稲荷・鎮守神・仏などのありとあらゆる神様・仏さまに、「安産・合格・出世・栄身・交通安全・家内安全・病氣平癒・商売繁昌・旅行の安全・火災除け」などの祈願をする。普段は神・仏を忘れてしまつて、神を祭つたり、神に祈つたり、仏さまに頼んだりしない人までが、「苦しいときの神頼み」と言われるように、苦しい時、悲しい時、心配な時ほど神仏に頼る。したがって、もしも願ひ通りになれば、神・仏に感謝し、お礼参りをする。願ひが通らないと、「神も仏もないものか」とばかり、神・仏をのろい、嘆き悲しむ。すなわち、日本人はおおむね、神仏への神仰・信頼と同時に神仏への甘え、馳れ過ぎがあり、神・仏・自然に対する驚くべき無関心さを示すことがある。神仏・自然の怒りに対しては神仏を祭り、合掌して祈ることによつて許され、救われ、苦悩を忘却してしまう。「おおらか」とでも言いうる特性である。

中国 古代中国の人々は、神話時代から夏・殷(商)・周の王朝までは黄河流域がその世界であつた。このうち、殷王朝までは神を信じ、神と一体の生活をしてきた。病氣をしても、躓いてころんでも、何かの祟たたかではないかと畏れて占う。雨か雪か風か、どんな天候であろうかと占つた。狩猟の時期や方角、農耕の播種・刈入れ、戦の時期・方角などにもすべて「卜」によつて占ひ、神の意志をたずねてから行動した。とくに殷王朝の人々は神との一体の生活であつた。鬼神(祖先神)の祟を避けるために、もしくは狩猟・農耕・戦争の吉凶や時間・方向について神に占っている。その際に、血のしたたる犠牲をささげて神の意志を占つた。したがって、神に近づき、神の意志を占う手段・手続きがますます煩雑になつた。そこから、神を祭り、神に祈り、神の意志を占うための用具である「青銅器の器具類」や「卜辞を書きとめた甲骨文字」が発達した。ところが、文化程度の低い周王朝の人々が

文化の高い、神と一体化した生活をしている殷王朝を亡して、殷の高い文化を継承した。しかし、殷王朝よりも文化水準が低く、農業を中心とした簡素な生活をしていた周王朝の人々は現実主義的な性格が強く、殷時代の人々のように、神と一体化したり、神がかりした生活はしていなかった。殷のように、神や鬼神や上帝を気にするようないことはしなかった。むしろ、鬼神や神よりも「天」を重視していたようである。

黄河流域の風土は黄土ばかりの荒漠たる平原で、山川草木の美しさがなく、親しいものではなかった。しかも、その風土は戦乱や大洪水・旱ばつ・虫害の被害が恐ろしく、むしろ天の方が美しく、親しみがあり、神秘的でもあった。したがって、中華の人々は「天」が創造者であり、絶対者であると考えだした。「詩経」の中で、天に関する知識、天に関する豊富な形容詞があらわれるのも、それを物語るのであらう。例えば、「上天」「蒼天」「旻天」「昊天」「皇天」などの豊かな表現がある。しかも、この世の苦しみを天に訴え、世の乱れを天に向って慨き、のろい、救いを求めている。「明々たる上天下土を照臨す」⁽¹⁾「悠々たる蒼天これ何ぞや」⁽²⁾「悠々たる蒼天いつかところあらん」「天篤く喪を降せり」「浩々たる旱天　その徳を驥^{おおい}にせず、喪飢饉を降す」「悠々たる昊天　罪なく罪なきに　乱かくのごとく懽^{おおい}なり」などと。

中華の人々にとっては、世界は天・地・人から成り立っており、人間にとっての救いは人にも地にもなく、美しくも広大な天を仰いで、天を信じ、天を頼み、天にやすらぎを求め、天に救いを求めることであつたのであらう。すなわち、天を絶対者とし、天が人間を生み（天烝民を生ず）、下界に君臨し、人間の吉凶禍福をつかさどり、天下の治乱・興亡を与えるものであり、王朝の交代、飢饉、災害、天変地異、人間の生死と運命及び人の才不才にいたるまで、すべてを天が賦与するものと考えてきた。いわゆる、「天命思想」「天命観」なるものが形成されて

きたといえるであろう。

その「天命觀」なるものの政治的意義を考察してみよう。天の意を帯した天子が天に代つて、天の道を行つて天下を治める。すなわち、天命を奉じたものが天子となることになる。しかし、為政者が天の命を奉じ、天の道を行っているかどうかが問題である。それを評価する方法として「民の声」が利用される。これについて、孟子は次のように述べている。「天視自我民視 天聽自我民聽」⁽³⁾「天の視るは我が民の視るに自う^{したが}。天の聴くは我が民の聴くに自う」と。すなわち、民の心が天の心であり、民の声が天の声であるという。同じく書経は次のように述べている。「天聰明自我民聰明 天明畏自我民明威」⁽⁴⁾（天の聰明は我が民の聰明に自う^{すが}。天の明畏は我が民の明威に自う）と。書経及び春秋左氏伝はまた「武王曰……天矜于民 民之所欲 天必從之」⁽⁵⁾（武王曰く……天、民を矜^{あわれ}み、民の欲するところ、天必ずこれにしたがう）と。老子もまた次のように述べている。「聖人無常心 以百姓心為心」⁽⁶⁾（聖人には常心なし、百姓の心を以て心となす）と。みな民の声が天の声であり、民の意が天意である。すなわち、統治者、為政者は天の命、天意を上手に利用して、天下を手に入れたり、その正統性の根拠とする。それだけでは統治者の独裁や暴君・暗君の為政をチエックする方法がない。そこで、「民の声」「民」を設定して、民意・民声によって放伐し、命を革めることができるようにした。すなわち、「易姓革命」の理論的根拠となつた。

(四) 諦觀——天命觀

自然觀の相違、超越者・絶対者（神）と人間の關係の相違によつて、日本と中国との諦觀はきわめて対象的な相違を見せている。

日本 美しくかつ規則正しい変化をする日本の風土によつて形成された日本人の諦觀は、絢爛と咲き誇る桜花

が一陣の風に美事に散るさまにたとえられている。「いさぎよさ」「あきらめよさ」がその真骨頂である。

中国 その諦観は「天命観」と「没法子」によって示されている。「天命観」にもとづいて、中国では次のような言葉が昔から人口に膾炙かいしやされている。「為事在人 成事在天」と。すなわち、「物事は人が為すものである。しかし、それが成功するかどうかは天によって決定されるのだ」ということである。物事が不成功の場合、日本人は「神も仏もないものか」とばかり、神仏をのろう。しかし、結局のところはそれで「スツキリ」してしまう。しかし、中国では「ああ天なり、命なり」と悟りすましたようなことを表面上は表現する。本音のところは、それで終わりはしない。それは一時なあきらめであり、意志の中断である。中国の人々がよく使う「没法子」という言葉がある。「仕方がない」「方法がない」と訳される。しかし、その言葉を日本的に解してはならない。日本では、「仕方ない」「方法がない」ということは、それで意志や決意の終了を意味する。しかし、中国ではそれは一時的な意志や行為の中断であって、けつして終了ではない。それは、事態の解決が可能になるまで、もしくは困難な事態を突破できる条件が生まれるまでの一時的なあきらめ、中断である。したがって、「没法子」と言いながら、条件が熟するように努力することである。すなわち、中国人の諦観は日本人のように、「いさぎよい」とか「あきらめがよい」というようなものではなく、「天なり、命なり」と表面上はあきらめるような振りをするが、それは一時的なあきらめであり、一時的な意志・行為の中断であって、その間に条件が熟するのを待つか、その条件が熟するように努力することである。したがって、チャンスが訪れた場合とか、条件が熟した場合は、意志・行為を再開する。これは中国の厳しい風土の影響であろう。

(五) 風土の人間関係への反映

日本 その風土、自然環境の特徴は「閉された小世界」という点にある。すなわち、日本海・東シナ海・玄海灘・対島海峡によって大陸と隔離された島国である。そのため、大陸系の異民族の大規模な侵入と征服から守られていた。したがって、日本人独特の思考や情緒を持ちつづけることが出来た。また遣唐使船の往来が困難なものであったが、大陸の文化を吸収できる程度の往来が可能であつて、けつして孤立した環境でもなかった。

このような平和な島国はまた、山で囲まれ、区切られた小世界の集合であつた。このような「閉された小世界」では、毎朝・毎晩、同じような自然と同じ顔とが顔つき合わせて暮す生活であつた。しかも、八百万神を祭り、祈り、神に馳れ、神に甘え、神に許され、神に救われる思考があるため、神・仏・自然への畏れ、神や自然の怨りへの畏れは弱く、むしろ、神や自然の恩恵の方が大きく考えられている。したがって、日本人にとっての生活上の問題は、人と自然の関係よりも、人と人との関係が大切であり、しかも煩しいものである。

夏目漱石の「草枕」の冒頭に有名な次のことばがある。「知に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくこの世は住みにくい」と。また、川端康成の「美しい日本と私」の中で、「四季折々の美に、自分が觸れ、目覚めるとき、美にめぐり会う幸を得たときには、新しい友が切に思われ、その喜びをともしたいと願う。つまり、美の感動が人なつかしい思いやりを強く誘いだす」と述べている。

このように、日本人は美しさにつけ、悲しさにつけ、世の煩わしさにつけ、その生活様式は人と人との関係が中心である。その煩わしさを避けて、花鳥風月を友として、浮世から逃避して、煩わしさを癒そうとするのは、文人墨客のような一部の人達である。多くの日本人は、煩わしさから逃避することもできず、人と人とのつきあ

いが大切となり、義理・人情を重視する。

また、山で囲まれ、谷や川で区切られた「閉された小世界」に住む日本人は、小規模な同じ水源を共有して、二千年も前から働いている。しかも、集約的な水田稲作の生活から、同じ顔といつも顔つき合わせているので、人と人との関係では、「和」が尊ばれ、「和」が大切にされる。したがって、「集団指向性」「集団主義」の特性が生まれる。また、生活環境や自然環境が同じであるというよりも共有であることから、周囲の上手な生活の仕方、上手な生産の仕方を見習っていれば、けっして間違いはない。したがって、「大勢順応型」「大勢追随型」の主体性のない、没個性の特徴が顕著にあらわれる。

このように、閉された小さな社会や世界では、「和」の尊重、「集団主義」「大勢順応」が特徴としてあらわれることから、集団内の結束の強さと親密さが尊ばれる。そこで、「ナカマウチ（仲間内）」、「ウチワ（内輪）」の仲間意識とその倫理である「義理」「人情」「仁義」が重視される。したがって、この仲間意識を欠いたり、「義理・仁義・人情」を欠くと、その仲間の集団から「村八分」にされる。

以上のように、「閉された小さな世界」の中では、「和」が尊ばれ、「集団主義」「大勢順応」の傾向が強く、「ナカマ」「ウチワ」意識が強く、「義理・人情・仁義」が重視される。

また「閉された小世界」では、すでに述べたように、いつも同じ自然環境や生活環境の中で、同じ顔と顔をつき合わせているから、「眼つき」「顔つき」で「以心伝心」する。「アレ」「ソノ」「アノ」「コレ」という語句だけで、その意味や意図を了解できる。すなわち、あまり言葉は使わずに済んでしまう。したがって、言葉を使うことが不得手であり、社交性が乏しい。現代の日本人の外国語下手、社交下手もそこからきているようである。ところが、

集団外の「ヨソモノ」には、仲間意識の強さを反映して、極めて形式的・儀礼的冷やかな対応をする場合と、ごく「ウチワ」的待遇をする場合とがある。一般的には、前者から後者になる場合が多い。

中国 その風土・自然環境は日本と対象的で、それは「開かれた広い世界」ということができる。古代の黄河流域の生活でも、東夷・西戎・南蛮・北狄の異民族がやってくる。シルクロードを経て、紅毛碧眼の異人がどんどん入ってきた。したがって、中華の人々は毎朝、毎晩、未知の人々に出会い、未知の出来事に触れてきた。未知なる人々の群の中で、未知なるものと出合つて生活し、生き抜くためには、「利己」に徹しなければならぬ。利己に徹して生き抜くことは、自分の力で自分の生命・財産・地位を守ることである。したがってそのための能力・知恵が育成された。まず、自分の意志・自分の考えを他人に伝えること、すなわち、「説得力」「PR術」が重視された。人を説得するには、論理よりも話術である。したがって、中国の人々は言葉が巧みであり、言葉によって、人間関係をつくり、自己の意志・思考を相手に伝え、説得する術・社交術に長けていた。

中国史の中でも、早くも春秋戦国時代に、話術に巧みな戦略家・戦術家が活躍している。強国の秦に対抗するために、燕・趙・韓・魏・斉・楚の六国の同盟を説いた「合従論」の蘇秦。その反対に、六国同盟を切り崩すために、横の二国間協定を秦と一国づつがつくるという「連衡論」を説いた張儀などがあげられる。

今日の中国共産党の機関紙・誌の「人民日報」「紅旗」の論文や、中国外交部声明などの論調も、論理性よりも説得に重点が置かれていて、重点を何回でも繰り返している。論理性を重視する西側の文章、とくに日本の文章が重複や繰り返しを避けるのとは対象的である。

また、スケールの大きい洪水・早ばつ・虫害という苛酷な自然災害やうち続く戦乱と苛斂誅求という苛酷な社

会の中で生きるためには、自分の力で自分の生命・財産を守らなければならない。誰も守っては呉れない。したがって、中国の人々の思考・性格の中には、「利己主義」「生命・財産・地位への強い執着心」「戦闘性」「忍耐力」「強靱性」「妥協性」という特質が形成された。

人と社会との関係で、中国の人々の「利己主義」「個人主義」が強くあらわれる場合がある。中国では、企業・社会・組織の中で、よく「我不管」（私は関係ない）、「偕們管偕們」（自分達のこととはそれぞれで処理しよう）という言葉がつかわれる。自分のことだけをやればよい。ほかの事は知ったことではないということである。非常に個人主義の徹底さである。今日の中国でも使われている。日本でも戦後このような傾向がある。それでも、企業・組織の中で、女性が職場の仲間のために、お茶をくんだり、掃除をしたり、花をかざったりする美風が残っている。また終業のベルが鳴っても仕事の終わらない友人がいれば、皆で助け合っている。自分の会社の発展のために残業も休日出勤もする美風も残っている。これらは、日本人の「ウチワ」意識、「集団主義」「集団への献身性」があらわれているわけで、これがまた、日本の企業の成長を支える一因となっている。逆に中国の場合は、個人主義・利己主義が徹底しているため、それが企業・社会の発展を阻害する一因として作用している。

二、家族・社会構造と民族的思考

日本 その家族制度は家が中心で、人間関係は縦の父子関係が基本である。したがって、「ウチ」の倫理としては夫婦・親子の長幼の序が重視され、「ウチワ」の和、しめやかな情愛、いつくしみ、家を守るための自己犠牲・勇敢・不惜身命が尊重される。

中国 その家族制度は「宗族制度」と呼ばれる大家族制度で、縦と横の血縁のネットワークで構成される。それは血縁社会とも呼ばれる構造に発展する。この血縁のネットワーク、すなわち同姓のネットワークの中では、家長、宗族の長の統制のもとで、強い団結力と「相互扶助」が発揮される。しかし、血縁のネットワーク外のもの、すなわち、他姓のものに対しては逆に強い排他性が発揮される。

日本の社会 日本の社会は家（イエ・ウチ）の集合である。したがって、自分の所属する組織・会社・学校・官庁を「ウチ」、もしくは「ウチの何々」というように家の集合としての社会が特徴である。したがって、日本の社会の原理は「家」の原理がそのままあてはまる。すなわち、「ウチワ」意識によって結合された縦型社会であるから、とくに戒律、規律は必要としないが、「長幼の序」「親分子分」の関係が重視される。したがって、職場、企業といった集団内では「結束性」「団結性」「愛社精神」「愛校精神」「愛国心」が強い。したがって、その反映として、他の職場、他の企業及び他の組織に対する強い対抗意識があらわれる。第二次大戦後は、敗戦のショックや戦後の間違った教育の影響もあり、「愛国心」については拒絶反応が強い。しかし、職場・企業・組織内での団結性、結束性は相対的に増大し、日本の企業発展の一因となっている。

中国の社会 中国独特の宗族制度を中心とした縦横に広がった血縁のネットワークは、郷・鎮・屯などの村落社会を構成した。家族の姓を付した地名が各地に現存して、その名残りをとどめている。すなわち、中国の社会は宗族・血縁の縦と横のネットワークが広がって「血縁社会」を形成し、それがさらに拡大して、同郷会・同業会の結社などの社会を形成してきたといえるであろう。その原因もやはり、中国の苛酷な自然と社会とであり、そのような自然や社会の中では、自分の力と能力で自分の生命・財産及び地位を守らなければならない。ところが

自分独りの闘いと能力には限界があるから、頼りになる血縁・同族・同姓・地縁・同郷・朋友・同期・同門・同僚・上下関係などのありとあらゆる「よしみ」「友誼」「関係」を通じて、連帯を結び、相互扶助を受けたり、与えたりする。また、政治的・経済的・学問的な世界で、強い・優れた実力者を「ボス」とした「派閥」に入って保護を受ける。このような同族・同姓・同郷・同業種・同派閥という連帯の中では「相互扶助」「相互依存」が守られるが、異姓・異族・異郷・他派閥の者に対しては苛酷な排他性があらわれる。

三、文学にあらわれた思维——中国の人間像

(一) 古今奇観と大岡政談

中国の古今奇観 明朝時代の一六三二年に刊行された短編小説集「古今奇観」は当時の官僚・地主の悪徳・悪業を暴露したり、諷刺したり、俠気や友情をたたえたものである。その第三話に「滕県知事が亡霊にことよせて、財産争いを裁いた話」というのがある。その筋は次のようである。

「明の永楽帝のころ、今の河北省の順天府の太守であった倪氏には腹違いの二人の兄弟があつた。先妻が生んだ長男が悪人であつたので、倪太守はその死後に、後妻やその生んだ二男がどんな苦しい目に遭うかと心配して、死に臨んで遺言し、土地・家屋・現金のすべてを長男に、次男には古小屋と掛軸一幅を与えて、「いつか賢明な県知事がきたとき、掛軸を見せて裁いてもらえ」と言い遺した。案の上、次男や後妻は食うに困ってしまふが、長男は助けようとしなかった。九年後に、滕という評判の県知事が着任したので、さきの掛軸を見せて訴え出た。滕知事が掛軸を見ると、倪太守が左手に赤子を抱いて、右手で地面を指している図で

あつた。その右手の部分の下貼りをはがしたところ、「次男に与えた古小屋の壁に、金・銀一万両がかくしてある。すべて次男のものである。裁いた知事に、お礼として三百両をさしあげなさい」とあつた。そこで膝知事は倪家を訪ね、関係者立合いのもと、故人の倪太守の亡霊と話しをするふりをしながら、古小屋から、一万一千両を掘り出して、それが次男のものであると判決した。

ということ目出度／＼であるが、ところが、その時、膝知事は倪太守の亡霊とさもやりとりしているような仕草をして、金一千両の壺をせしめてしまうというストーリーである。

日本の大岡政談は、さきの中国の膝知事の裁きに対応する名裁判官物語である。江戸北町奉行である大岡越前守が江戸の悪役人と悪徳商人・ごろつきとの悪の癒着をあばいて、江戸の人々の喝采を博し、人々の溜飲をさげさせるお話で、現在でもこの大岡裁きはテレビ視聴者や読者をヤキモキさせたり、ストレスを解消している。この名奉行大岡越前の守は、いささかの曇りもなく、私利私欲もこやさず、公明正大な名判官として画きだされているのである。

中国の裁判官は名裁きに便乗して、懷を肥やしてしまうように、きわめて人間的に、立体的に画かれる。日本ではまさに公明正大にして一点の曇りもない人間像に画かれている。この中国と日本の人間像の相違はやはり、風土の相違による思考の相違を明らかにしているといえよう。

(二) 水滸伝（中国）と里見八犬伝（日本）

中国の水滸伝 中国の四大奇書の一書として著名であり、幾世紀にわたって語り継がれ、人口に膾炙かいしやされながら、スケールの大きい、豪快小説として集大成されたもので、そのあら筋は次のようである。

「宋の仁宗帝の頃、国内に疫病が流行して、毎日数限りない人々が死んだ。この疫病を絶つために、道教の大本山である江西省の信州の竜虎寺に住む嗣漢天師・張真人を召して疾病はらいの祈禱をさせることになった。洪信という將軍が勅をもって竜虎山に派遣されたが、ここで洪信は寺の伏魔殿の地下室の大瓶を無理矢理開けさせてしまう。途端に底の方からゴウ／＼たるすざましい大音響がとどろき、ムク／＼と真黒な煙が一筋立ち昇り、伏魔殿の一角をつき崩れてまっしぐらに天空にたちのぼると、百八本の金色の光ががやいて百八人の大魔王が四方八方に飛び散り、百八人の豪傑に生まれかわる。彼らは後に山東省の梁山泊にたてこもって、時の悪徳官吏や地主達を懲しめるという痛快無比のお話である。」

主人公の宋江をはじめとして、百八人の山賊たちは、法を犯し、秩序を破り、ありとあらゆる罪惡を犯すが、その一方では、悪徳官吏や地主たちをやっつけ、痛めつけられている弱い者や民衆を救うという勧善懲惡小説で、腐敗した官僚制に対する民衆の憎しみをこの小説によって晴らし、民衆がストレスを解消するわけである。この中で、百八人の山賊の人間像は悪であるが、善でもあり、血もあれば涙もあるというように、血のかよった人間として、立体的に画いている。

日本の南総里見八犬伝 滝沢馬琴が書いたこの南総里見八犬伝は、さきの水滸伝の手法を多分に借りている。仁・義・礼・智・信・忠・孝・友の八つの玉をくわえた八匹の忠犬と八人の美男・美女が坂東太郎（利根川）のほとりで、主家の里見家再興に活躍するという、これもまた痛快にして、典型的な勧善懲惡の小説である。滝沢馬琴がここで画いた人間像は、善を美德として、善・正義に徹することを要求したもので、武士道の権化を理想としたものであった。しかし、善人や正義の人だけでは小説が立体的にはならないし、善や正義が常に悪と不正に

勝つものでなければならぬところから善や正義を妨害する悪人を設定して立体的なストーリーにしている。

以上のように、中国の人間像は、個々の一人々々の人間の中に、善も悪も、正義も不正義も住み、自己の生命・財産・地位が危機に瀕したときには、それを守るために悪を正当化する。すなわち、善人であるが、悪人にもなる。正義の士であるが不正義も正当化するというのである。日本の人間像は、一人の人間の中には善か悪、正義か不正義のどちらかが住んでいる。善や正義の士か、悪か不正義の士という考え方である。やはりここにも、中国の苛酷かつ複雑な自然と社会の反映があらわれ、日本の美しい風土と規則正しい季節の変化と単純・平直なものが反映しているようである。

四、外来文化の受容の構造

外来文化の受容の仕方には三つの類型がみられる。高い文化が低い地域に流入する一般的な方式は、それが侵略や征服をともなつて、高い文化が低い地域に流入する。このため、低い文化地域の人々は常に高い文化に対する憧憬と崇拜とともに強い警戒心と不安感をいだいている。第二の類型は日本の方式である。

日本の外来文化の受容 日本が大陸から隔絶して、四方海に囲まれてきたという自然環境によつて、征服とか侵略とは無関係に外国の文化が流入した。この外国文化の流入にあつて、第一に日本的思惟構造が強いセンサーの役割を果たした。それは、外国文化の受容に際して、日本の風土とそれによつて育成された日本的思惟が作用して、日本に適さないものは排除された。

例えば、八百万神を信する日本人にとって、一神教のキリスト教やイスラム教は理解できなかった。本学アジ

ア研究所所長梶村昇教授(宗教学)のお話によると、キリスト教が日本に渡来するに際して、キリストを大日如来とすることによって日本人に受容されたということである。日本人の思惟がセンサーとして作用した例である。また、遊牧民族の牧畜の方法は導入したが、仏教の影響で食肉の習慣は導入しなかった。ドライな風土で発達した宦官の制度も、日本のような湿潤なウェットの風土ではなじまなかった。隋朝以来、中国で発達した高級官僚登庸の「科挙の制度」や「天命思想」とそれにもどづく「易姓革命」の思想は、万世一系の天皇を中心として上下がつながっていた日本では、あまりなじまなかった。

第二のセンサーは、当時の日本の社会が貧困であつたか豊かであつたか、寒冷気候であつたか、温暖気候であつたかどうかという、貧富・寒暖が作用した。その貧富・寒暖によって、外来文化受容の態度が選択されたのである。貧しい生活環境のときは、日本人の血の中にある遊牧・騎馬民族のバイタリティ豊かな性格が躍動して、外の世界の富や文化に強い関心を向け、貪欲に新しい文化を吸収した。外国の武力とか侵略とは切り離して、外国の文化に接したことから、外国人や外国の文化に対して不安とか警戒とか恐怖というものを感ずることもなく、吸収しうるもの、すなわち、日本の風土や日本人の思惟に許容されるものは、そのまま変形することもなく、盲目的とも、貪婪とも言いうるような吸収をして、模倣した。飛鳥、奈良、安土、桃山、明治、大正、昭和三〇年代から五〇年代がこのような時代に当るであろうと考えられている。

富の蓄積が行われると、南方農耕民族の血が活動して、より対内的な充実、もしくは内部蓄積をより高めようとする傾向が強くあらわれる。すなわち、鎖国的、自己充足の傾向が強くなる。それまでに、旺盛な好奇心で、貪婪な吸収をしてきた異質の文化に対して、それをよりよく消化して、日本の風土や日本人の思惟により適応し

たものへと発展させる。いわゆる「日本的創造」と呼ばれるような発展が行われた。平安、鎌倉、江戸、昭和の初期がそれに該当するであろうと考えられている。

すなわち、盲目的な吸収、貪婪な吸収の時期が過ぎると、それをよく消化して、日本に適應するものへと発展させるという日本の創造が行われた。例えば、中国の儒教を日本に導入した場合について考察すると、中国の支配階級であった士・大夫のための哲学・倫理学が、まず朝鮮に入ると、時の李朝では、仏教を押えて、支配階級から民衆までが儒教一色に塗りつぶされ、冠婚・葬祭までが儒教の礼で行われるようになった。日本へ儒教が入ってきたのは、一六〇〇年頃で、江戸時代初期である。支配階級であった武士階級の教養として、仏教にかわって儒教がもてはやされるが、しかし、儒教の礼は武家社会の冠婚葬祭には利用されなかった。むしろ、武家社会では、従来からの伝統的な神式とか仏式とが用いられた。また、その儒教も、高度な論理性をもった朱子学からよりシンブルなものにかえられた。仏教の導入の場合でも、インドの厳しい小乗戒が中国に入り、厳しい小乗戒からさらに緩い大乘戒にかわり、それを空海―最澄が中国から持ち帰り、最澄がその中国の緩い戒律をさらに緩くし、ついには、その戒律まで仏教の修養からはずしてしまった。法然はさらに、釈迦を思い浮べて、南無阿弥陀仏を称えれば成仏できると説いた。親鸞はまたさらに戒律捨てて、生地まるだしの宗教にかえってしまった。このように、外国の文化・思想・宗教も、吸収し、消化すると、日本の風土、日本人の思惟に適するようにつくりかえてきた。

中国の外来文化受容が第三の類型である。征服や侵略だけでなく、交易によっても外来文化が導入した。この際、中国では、二つのフィルターがかけられた。日本の場合には日本の風土、日本人的思惟というセンサーが作用して、

取捨選択が行われたが、フィルターはかけられず、本来の姿で受容し、消化・吸収した上で、日本的に変容した。中国の場合は、フィルターをかけて、変容して導入した。第一のフィルターは中国語への翻訳によって、中国化ということでフィルターがかけられて変化した。第二のフィルターは、中華意識・中華思想のフィルターがかけられた。

第一のフィルターの作用についてみると、抽象的概念や思想をまず中国語に翻訳するが、そのプロセスで、中国的なものに変化し、中国化されて変容されてしまう。しかも断章取義という中国独特の方法で、都合の悪いものは捨て、都合の良いものだけ取り入れる。もしくは換骨奪胎してより中国的なものにしてしまう。

例えば、キリスト教は景教として、イスラム教はモスクを中国的な廟の形にし、清真寺というように、中国の仏教・道教と外見上同じにして受容する。

第二のフィルターは、中華意識・中華思想のフィルターである。中華意識・中華思想によって、中国の文化が世界で最も優れ、最も古いものだと考える。その思考のために、外国の文化は、いかに高度であろうとも、いかに優れたものであろうとも、異質な文化とは認めず、その源は中華の文化であり、中国の世界に存在したもので、それを発展したものに過ぎないと考えた。同質で、源を同じにするという思考は、外国文化を異質の文化、対立する文化とは認めない。対立する異質の文化として認めないが故に、外国の高い文化を移入しても、それを吸収、消化、発展する努力、それから中国的創造をするというプロセスが軽視された。

例えば、遊牧民族がもたらした異文化、また西欧の近代文化に接した際に、それを、もとく中華の世界にあったものとして受け容れる。その代表的な例は、アヘン戦争の敗北で、中華の世界の外、すなわち化外の西洋にも

文化・学問があることを認めて、導入に努めるが、誇り高い・自己中心的中華意識はその面目を保つために、西洋の学問・文化・思想・科学の渊源が、中国の古典の中にあり、中国の古典の世界から西洋の学問・文化・思想・科学が発展したものとして自己満足した。したがって、西洋の高度な文化を消化・吸収・発展することよりも、中国の古典・中国の伝統的文化・思想の中にその渊源を求める考古学的考証が発展した。日清戦争の敗北にあたっては、夷狄である日本に敗れたショックから、「中体西用論」があらわれ、中国の学問が本体で、西洋の学問は中国の学問の応用、発展だという自己弁護の論が流行した。社会主義中国になっても、マルクス・レーニンの理論を中国式に変容し、毛沢東思想が現代マルクス・レーニン主義の最高峰とした。これらは中華意識・中華思想のフィルターをかけて、質の高い外国文化の吸収・消化・発展を阻害した。このことが中国の文化と社会の発展及びその近代化を阻害しつづけている一つの大きな要因となっている。

五、歴史にあらわれた民族的思惟

各民族の歴史には、その民族が生活してきた風土、そして、そこから形成された独特の民族的思惟が反映して、民族独特の歴史のパターンを形成するものである。

中国の歴史のパターンの一つは「一張一弛」である。それは中国の歴史の伝統であり、中国の政治の要諦とも考えられてきたものである。付図「1」の中国の「一張一弛」のパターンに示したように、「張」とは理想主義にはしるか、現実の社会情勢を無視するか、軽視して、民衆の生活や民衆の心を軽視し、社会改革や制度改革をスピード・アップする政府もしくは政策である。「弛」の政策を行った政府は民衆の支持を失う。民衆の支持を得て、民衆の

レジスタンスを指導した地方豪族が、「天命思想」にもとづいて、「造反有理」の「易姓革命」を行って新しい政府、すなわち王朝を樹立する。この政府（王朝）は前者の「張」の政府（王朝）の「張」の政策の轍を踏まないようにして、「弛」の政策を行う。「張」の政策とその結果としての戦乱に疲労しきった民衆の生活と心の回復をはかる。すなわち、民政を重視して、制度改革などは緩ゆっくりやり、現実を重視した政策を実施する。すなわち、民政・内政に力を入れるから、富は蓄積され、文化が発展し、隆盛の時代となる。そこで、長期政権を維持することになる。しかし、これらの「弛」の政府（王朝）もまた初志を忘れて、宮廷の奢侈のために重税を課したり、富の蓄積をしうとして外国遠征を行い、かえって、民から戦費を徴発し、民衆の疲弊と不満とが高まる。この民衆の不満を利用した地方豪族が農民のレジスタンスを結集して、農民革命を起して、新しい王朝（政府）をつくることになる。この「弛」の政策（王朝）のあとを受けた政府（王朝）は、長い戦乱による疲弊を回復することが先決であるのに、前政府（王朝）の基調とは反対の政策を採用する。「弛」とは反対に、理想主義にはしり、現実や民衆の心などにおかまいなく、急進主義的政策を実施する。すなわち、「張」の政策を実施する。「張」が亡びると「弛」が興り、「弛」が亡びると、「張」が興る。このように「一張一弛」が繰り返される。この「一張一弛」のパターンは、本学アジア研究所紀要一九八〇年版（第七号）の拙稿「現代中国における政策選択のプロセスに関する研究」において叙述したように、中華人民共和国の三十余年の歴史の中で展開された社会主義政策にも、この「一張一弛」の転換があらわれている。

このような、「一張一弛」の転換をもたらす条件は⁽⁷⁾いわゆる中国なるものである。それは、未開発・未統一かつ統治能力を超えた広大なスペース。その上に世界人口の四分の一という膨大な人口が生活し、この人々は数千年

の中国の歴史と自然の中で培われてきた中国の伝統的思考と社会構造をもって生き続けていることである。これらの条件が続くかぎり、「一張一弛」のパターンは種々の型体の変化を示すであろうが基本的に継続するであろう。

日本の歴史のパターン。中国の歴史のパターンの一つが前述のように特徴あるパターンを示しているが、日本の歴史の中にも相互転換をするパターンがみられる。それは前述した「外来文化受容の構造」の項で既に言及したように、日本の風土とそれによって培われた日本的思惟とによって、外来文化の受容の仕方、対外政策の基本構造が決定される。しかも、それは、外に門戸を開放する政策と、逆に門戸を閉じてしまう政策とが相互に転換しているということである。

桶口清之氏の「日本人の知恵の構造」⁽⁶⁾の中で次のように指摘している。「寒流と暖流の二つの海流は、日本人の生活に大きな影響を与えてきた。……寒流が南下したり、北上したりして周期をつくっているので、地上の気温もこれにしたがって変化する。日本は約三百年ごとに暖い時期と寒い時期とが交互に訪れている。例えば、平安時代には、この気温周期の谷に当たっていて、貴族の服装を見てもわかるように何枚もの重ね着をしている。それから約六百年後にまた寒冷期の底が来て、暖地系の植物である稲が稔らなくなった。これが天明の大飢饉（一七八三―一八七年）の原因である。天明の前の寒冷期は、前九年の後（一〇五一―一〇六二年）、後三年の役（一〇八三―一八七年）の戦乱が続いた平安末期である」「海流の変化が生活に大きな変化を与えるばかりでなく、歴史の上にも大変革をもたらす。その極端な例は、明治維新である。その遠因は天明の飢饉にあると考える。平安末期の飢饉によって、貴族が没落して、武士が台頭。平家の時代から、鎌倉時代へと移行する」と。

また、「日本文化の構造」⁽⁹⁾の中で、江上波夫氏、上山春平氏らは、日本の歴史にあらわれた二面性のパターンに

ついで、「排外と排外」の二面においてとらえている。「農耕的な性格や行動様式がでてくると、土地に定着して、農業生産による富の蓄積や文化の発展をはかり、自給自足的生活圏を形成する。したがって、関心は内に向けられよそのものは危険であり、よからぬものと考ええる。したがって、対外的関係は薄くなり、鎖国的傾向を持つ。吸収した文化を消化し、より日本的なものへと発展させようとする。また、牧畜民、騎馬民族の性格があらわれると、貧しい生活環境の中から、外の事物や文化に対して旺盛な好奇心とエネルギーとを向けて、外の富や文化を得ようとする。したがって、外に対しては敏感で、国際関係は広くなる」と指摘している。

以上に紹介したような諸説を綜合して、次のような假説を設定できよう。

「日本文化の構造」の一八五頁の「日本文化の波動」の図は、付図〔2〕に示した「排外と排外が相互転換する日本歴史のパターン」として考えることができよう。

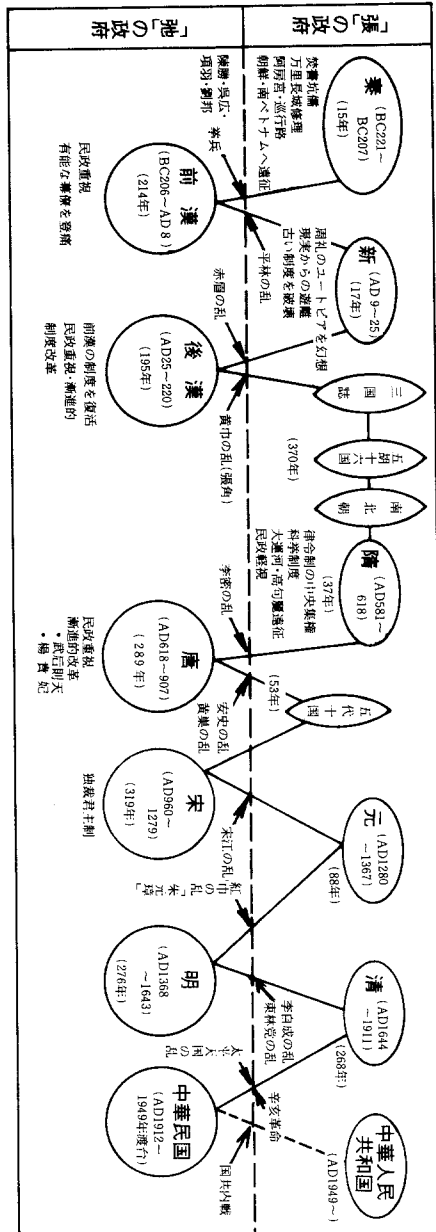
六百年のサイクルで、ほぼ千二百年を周期とする日本の歴史のパターンは、寒冷期に当って、農業生産が低下し、貧しい生活環境に入ると、日本民族の血の中に流れている遊牧民、騎馬民族の性格が活動して、外の富や文化を貪欲に吸収し、模倣する。したがって、排外的・対外指向の強い傾向がでてくる。逆に、暖い時期になると、農業生産が向上し、富が蓄積されて、農耕民の性格が強くなる。定住の自給自足的生活圏の中で、関心は内側に向けられ、外のものへの警戒心が強く、対外的には鎖国的傾向をもち、すでに吸収した文化をより消化し、日本の風土と日本的思惟に適したものに発展させると考えることができよう。

以上のような、中国の「一張一弛」のパターンも、日本の「排外と排外の相互転換」のパターンも、それぞれ、その風土とそこに住む人々の思惟構造とを反映してあらわれているといえよう。

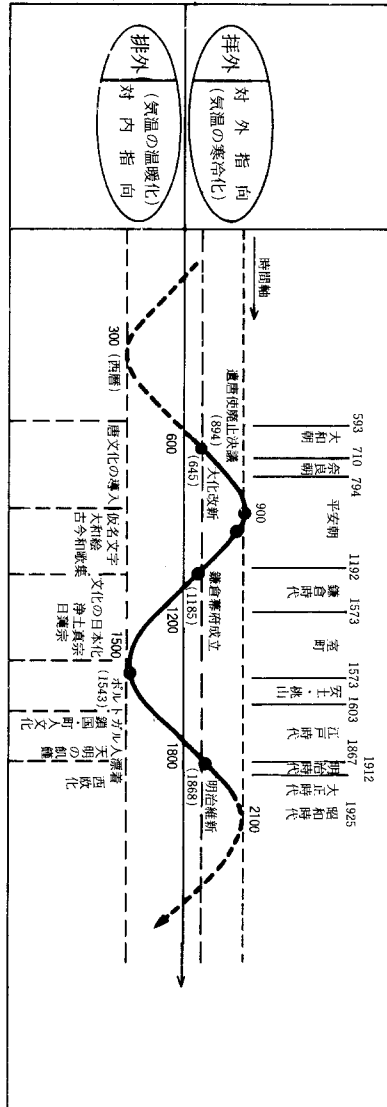
(註) 本稿の叙述にあたつて、とくに次の文献資料に負うところが大きであつた。

- ① 「論集・日本文化1」「日本文化の構造」(講談社現代新書、江上波夫、上山春平)
 - ② 「日本と中国」 江上・上山・梅原・中根編。小学館)
 - ③ 「日本人の知恵の構造」 桶口清之、角川文庫
 - ④ 「日本人の人間関係事典」 南博編。講談社。
 - ⑤ 「中国の中の中」 桑原壽二。日本工業新聞社。
 - ⑥ 「対の思想」 駒田信二、勁草書房。
- (註)(1) 詩経「明々上天 照臨下土」
- (2) 詩経「悠々蒼天 此何人哉」
- (3) 孟子「天視自我民視 天聽自我民聽」
- (4) 書経「天聰明自我民聰明 天明畏自我民明威」
- (5) 書経・左伝「武王曰……天矜于民 民之所欲 天必從之」
- (6) 老子「聖人無常心 以百姓心為心」
- (7) 亜細亜大学アジア研究所紀要第七号(一九八〇)の拙稿「現代中国における政策選択のプロセスに関する研究」
- (8) 「日本人の知恵の構造」 桶口清之。角川文庫。
- (9) 「論集、日本文化1」「日本文化の構造」(講談社現代新書。江上波夫。上山春平)
- (10) (註)(9)に同じ

【付図(1)】中国の一張一弛のパターン



【付図2】 排外と排外が相互転換する日本歴史のパターン



(註) 「日本文化の構造」(講談社現代新書)の185頁、上山善平氏の日本文化の波動より。